

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

昭61-236716

⑬ Int.Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 昭和61年(1986)10月22日

A 61 K 7/025

7306-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全8頁)

⑮ 発明の名称 口紅組成物

⑯ 特 願 昭60-75346

⑰ 出 願 昭60(1985)4月11日

⑱ 発 明 者 池 田 敏 秀 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内
⑱ 発 明 者 大 村 真 紀 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内
⑱ 発 明 者 田 中 宗 男 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内
⑲ 出 願 人 株 式 会 社 資 生 堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号
⑳ 代 理 人 弁 理 士 青 木 朗 外4名

明 細 書

1. 発明の名称

口紅組成物

2. 特許請求の範囲

1. (a)ワックス及びワックス状物質の少なくとも一種、(b)液状及び半固型油分の少なくとも一種、(c)着色顔料及び白色粉末の少なくとも一種並びに(d)成分(a)の固化力を低下せしめる親油性ゲル化剤を配合してなる口紅組成物。

2. ゲル化剤が、金属セッケン、親油化ベントナイト、アミノ酸誘導体、デキストリン脂肪酸エステル、ショ糖脂肪酸エステル又はソルビトールのベンジリデン誘導体である特許請求の範囲第1項記載の口紅組成物。

3. 発明の詳細な説明

産業上の利用分野

本発明は、中味内蔵型の紅筆タイプ口紅に適したペースト状の口紅組成物に関し、更に詳しくは、通常のスティック状口紅にゲル化剤を加えることによ

り、ペースト状で且つチキソトロピー性にした口紅組成物に関する。

従来の技術

口紅は、多種多様の色調と綺麗な光沢を有し、唇に塗布することにより唇を美しく見せる作用を有する化粧品であるが、市販口紅の大部分はスティック状であり、唇の弱い人に対しては時として塗布時の摩擦により唇が荒れたり、使用途中でスティックが折れたりするという欠点があった。更に、このようなスティック状口紅の最大の欠点は、面で塗る為、唇の輪郭を描きにくいということであった。唇の輪郭を綺麗に仕上げることは唇を美しく見せるのに不可欠の要素であり、その為、大抵の女性は紅筆を使用して、スティック状口紅から紅筆で中味を取って使うことを行なっている。この場合、口紅と紅筆は別々に携帯することになり、煩雑であるので、紅筆に口紅中味が内蔵されているタイプの口紅が望まれていた。このような女性の化粧動作を勘案した紅筆タイプ口紅は、過去何度か市販されたことがあった。しかし、いずれの場合にも内蔵された中味を紅筆に押

し出すには中味を柔らかくせざるを得ず、スティック状口紅を直接口紅に塗った場合や、スティック状口紅を紅筆を用いて唇に塗った場合と比べ、著しく質感が異なり、油っぽく唇上で塗布物が動き、もちが悪く、周辺の毛穴等にしみやすいものであった。これは通常のスティック状口紅は主として、ワックス、油分、粉末から成っているが、紅筆タイプにする場合、その配合からワックスを減量若しくは除去しなければならない為に生じた結果であった。

発明が解決しようとする問題点

この様に、中味内蔵型の紅筆タイプ口紅の中味は、中味を押し出す為には軟らかくなくてはならないが、唇に塗布された時には通常のスティック状口紅と同じ仕上りにならなくてはならないという背反性を有していた。即ち、中味を良好に押し出す為の目安として、粘度は50,000cps以下(30℃におけるB型粘度計、回転数12rpmでの値) 硬度は7~10以下(スプリングバランス式カードメーターを用い、30℃において、200gr荷重時における直径1.5mmの針が没入する際の抵抗値を100目盛の値で示したものであ

り、値の大きいほど硬いことを示す)であることが必要であり、この条件を満たす為には、従来の技術ではワックス等の固型分を減量する以外に方法は見当らなかったのである。しかしその為に、口紅の使用性及び仕上りに大きな犠牲を払わざるを得なかったのである。

本発明者は、この様な従来技術の現状に鑑み、鋭意検討した結果、油溶性あるいは油分散性のゲル化物を通常のスティック状口紅に配合することにより、スティック状口紅をペースト化し、目標の粘度及び硬度にすることができ、これを中味内蔵型の紅筆タイプ口紅容器に充填して、使用に供した場合、中味が良好に押し出されるばかりでなく、通常のスティック状口紅と同程度の仕上りになることを見出し、本発明を完成するに至った。

問題点を解決するための手段

すなわち、本発明は、(a)ワックス及び/又はワックス状物質、(b)液状及び/又は半固型油分、(c)着色顔料及び/又は白色粉末に(d)親油性ゲル化剤、例えば金属セッケン、親油性ベントナイト、アミノ酸誘

導体、デキストリン脂肪酸エステル、ショ糖脂肪酸エステル、ソルビトールのベンジリデン誘導体の一種又は二種以上を配合し、ワックスの固化力を低下させ、常温でスティック状からペースト状に変化させたチキソトロピー性口紅組成物であり、この口紅組成物は中味内蔵型の筆付き容器に充填すると、簡便で、携帯性に優れ、しかも唇に塗布した時に、スティック状口紅と同じ仕上りを有する紅筆タイプ口紅とすることができる。

尚、本発明の口紅組成物は、紅筆タイプ口紅に限らず、チューブ、ボトルなどの容器に充填した化粧料とすることができることもいうまでもない。

本発明に従った口紅組成物が、中味が柔らかいのに関わらず、唇に塗布後の仕上りがスティック状口紅と同じなのは、本発明に於ては、従来の紅筆タイプ口紅と異なり、僅かの親油性ゲル化剤のみが加わっただけでワックス量がスティック状口紅と同量配合されている処方構成に起因する。

本発明に係る口紅組成物は(a)ワックス及び/又はワックス状物質、(b)液状及び/又は半固型油分、(c)

着色顔料及び/又は白色粉末及び(d)成分(a)の固化力を低下せしめる親油性ゲル化剤を必須成分としているが、成分(a)(b)(c)としては、通常口紅に用いられる任意の添加剤を使用することができる。そのような添加剤としては、例えば(a)ポリエチレンワックス、パラフィンワックス、みつろう、カルナバロウ、シリコンワックス等のワックス及びワックス状物質、(b)例えばラノリン、流動パラフィン、ヒマシ油、オリーブ油、高級脂肪酸、高級アルコール、高級アルコールと脂肪酸の合成エステル油、ジメチルポリシロキサン、ポリオキシエチレンソルビタン脂肪酸エステルなどの液状及び半固型油分、(c)例えばタルク、カオリン、雲母、硫酸バリウム、炭酸カルシウム、酸化チタン、酸化鉄、酸化チタンコーティドマイカ、魚鱗屑、ナイロンパウダー、赤色202号、カルサミンなどの着色顔料及び白色粉末をあげることができる。

本発明に用いられる親油性のゲル化剤は、同時に配合される前記ワックス又はワックス状物質の固化力を低下させるものであれば何でもよいが金属セッ

ケン、親油化ベントナイト、アミノ酸誘導体、デキストリン脂肪酸エステル、ショ糖脂肪酸エステル、ソルビトールのベンジリデン誘導体などの使用が好ましい。金属セッケンとしては水酸基の残存しているアルミニウムステアレートが最も望ましく、次いでマグネシウムステアレート、ジンクミリスレートが良い。親油化ベントナイトとしては、ジメチルベンジルドデシルアンモニウムモンモリロナイトクレー、ジメチルジオクタデシルアンモニウムモンモリロナイトクレーが良い。アミノ酸誘導体としては、N-ラウロイル-L-グルタミン酸、 α 、 γ -ジ- α -ノブチルアミンが最も良い。デキストリン脂肪酸エステルとしては、デキストリンパルミチン酸エステル、デキストリンオレイン酸エステル、デキストリンステアリン酸エステルが良い。ショ糖脂肪酸エステルとしては、8個の水酸基のうち3個以下が高級脂肪酸でエステル化され、高級脂肪酸がステアリン酸、パルミチン酸であるものが良い。ソルビトールのベンジリデン誘導体としては、モノベンジリデンソルビトール、ジベンジリデンソルビトールが良い。

本発明の口紅への親油性ゲル化剤の配合量には特に限定はないが、好ましい親油性ゲル化剤の配合量はワックス及び／又はワックス状物質の総量にもよるが、0.01～5.0重量%迄であり、更に好ましくは0.03～2.0重量%である。なお、本発明の必須成分であるワックス及び／又はワックス状物質の配合量は一般には5～40重量%で、好ましくは15～25重量%である。本発明の口紅組成物中の親油性ゲル化剤の配合量が0.01重量%未満であるとワックスがまだ固化された状態にある傾向あり、逆に5重量%を超えると、それ以上口紅は柔らかくならず、その上ゲル化剤以外の配合成分の配合量が相対的に減量されることになり、通常スティック状口紅の品質を維持にくくなる傾向にある。又これらのゲル化剤は、口紅基剤に直接溶解又は分散しても良く、あらかじめ油分等で分散処理をしておいても良い。

本発明に係る口紅組成物中の液状又は半固型油分並びに着色顔料又は白色粉末の配合量にも特に限定はないが、一般にはそれぞれ15～80重量%並びに0.1～35重量%配合する。

本発明に係る口紅組成物は、前記した必須成分の他に、従来口紅に配合されていた任意の慣用成分を含むことができる。例えば、常温で揮発性を有するイソパラフィンやシリコーン油、更に水やグリセリン等の保湿剤を含むことができる。

第1図にデキストリンパルミチン酸エステルを第1表に示す口紅処方に従って種々の濃度で配合した時の口紅硬度の変動を示した。硬度は飯尾電機KL製スプリングバランス式カードメーターを用い、30℃にて200gr荷重時における直径1.5mmの針が没入する際の抵抗値で100目盛の値で示した（値が大きいくほど硬いことを示す）。尚デキストリンパルミチン酸エステルは、処方中の流動パラフィンにあらかじめ溶解させて配合した。

(以下余白)

第1表：口紅処方

(重量%)

成 分	E	D	C	B	A	F	G	A'
ポリセキカヒ液流二赤赤チデ酸	4	4	4	4	4	2	2	—
リンパルミチン酸エステル	8	8	8	8	8	6	4	1
ス	7	7	7	7	7	6	3	1
ク	1	1	1	1	1	1	1	1
ス	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8
ス	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
ス	2.6	2.5.9	2.5.7	2.5.5	2.5.0	3.1	3.6	4.3
ス	1	1	1	1	1	1	1	1
ス	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
ス	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
ス	9	9	9	9	9	9	9	9
ス	—	0.1	0.3	0.5	1.0	—	—	—
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
硬度	2.7	2.2	1.6	1.2	6	2.1	1.4	6

次にデキストリンパルミチン酸エステルを1重量%配合した処方Aの口紅の50℃における粘度を測定条件(回転数)を変えて測定した結果を第2表に示す。なお粘度はB型粘度計にてローターを一定にし、回転数を変えて測定した。

(第1図におけるAと第2図におけるA')をそれぞれ中味内蔵型の紅筆タイプ容器に充填し、使用テストを行った。得られた結果は第3表に示す通りであった。

(以下余白)

第2表 デキストリンパルミチン酸エステル

を配合した口紅の粘度

回転数 粘度(cps)

6 rpm 20.950

12 rpm 10.150

30 rpm 3.700

60 rpm 1.150

これに対し、ゲル化剤であるデキストリンパルミチン酸エステルを用いずに、第1表に示した様にワックスを減量していった時の処方E、F、G及びA'の口紅の硬度の変化は第2図に示す通りであった。

更に、同一硬度(硬度6)の処方AとA'の口紅

第3表 使用テスト結果

n = 50 (化粧品5年以上で、紅筆を使って口紅を塗る習慣のある人)

(1) 紅筆タイプ口紅としての使用性

(望ましいと答えた人の割合)

中味の出やすさ

A	A'
---	----

のびの良さ

A	A'
---	----

重ねづけのしやすさ

A	A'
---	----

(2) 仕上り具合

-2	-1	0 *	+1	+2
----	----	-----	----	----

-------	--	--	--	--

にじみ	A'	A		
-----	----	---	--	--

(にじむ)	(にじまない)
-------	---------

もち	A'	A		
----	----	---	--	--

(もたない)	(もつ)
--------	------

つや	A'	A		
----	----	---	--	--

(ない)	(ある)
------	------

フィット感	A'	A		
-------	----	---	--	--

(ない)	(ある)
------	------

*スティック状口紅をコントロールとした。

第1図の結果は、ゲル化剤であるデキストリンバルミチン酸エステルを加えるにつれ、口紅が固まらなくなることを示している。また、この処方系は第2表に示したようにチキソトロピー性を示している。また、第3表の使用テスト結果から明かなように、ゲル化剤を配合して硬度を下げた口紅は、ワックスを減量して硬度を下げた口紅に比べ、にじみが少なく、もちが良く、通常スティック状口紅の仕上りにかなり近いものであることが明らかである。

実施例

次に実施例をあげて、本発明を更に詳細に説明する。本発明の範囲をこれらの実施例に限定するものでないことはいうまでもない。なお、配合量は重量%である。

実施例1、比較例1及び比較例2(口紅)

(実施例1の処方)

成 分	配合量 (%)
①ポリエチレンワックス	3
②セレシンワックス	4
③マイクロクリスタリンワックス	4

④カルナバロウ	2
⑤ヒマシ油	15
⑥ジ-2-ヘプチルウンデカン酸	
グリセリン	30
⑦流動パラフィン	29
⑧デキストリンバルミチン酸	
エステル	1
⑨赤色酸化鉄	1.6
⑩二酸化チタン	1.6
⑪赤色202号	1
⑫黄色4号	0.8
⑬チタンコーティッドマイカ	7
⑭酸化防止剤	若干量
⑮香料	若干量

(比較例1の処方)

成 分	配合量 (%)
①ポリエチレンワックス	3
②セレシンワックス	4
③マイクロクリスタリンワックス	4
④カルナバロウ	2

⑤ヒマシ油	15
⑥ジ-2-ヘプチルウンデカン酸	
グリセリン	30
⑦流動パラフィン	30
⑧デキストリンバルミチン酸	
エステル	-
⑨赤色酸化鉄	1.6
⑩二酸化チタン	1.6
⑪赤色202号	1
⑫黄色4号	0.8
⑬チタンコーティッドマイカ	7
⑭酸化防止剤	若干量
⑮香料	若干量

(比較例2の処方)

成 分	配合量 (%)
①ポリエチレンワックス	1
②セレシンワックス	1
③マイクロクリスタリンワックス	1
④カルナバロウ	1
⑤ヒマシ油	15

特開昭61-236716(6)

⑧ジ-2-ヘブチルウンデカン酸	
グリセリン	30
⑨流動パラフィン	39
⑩デキストリンパルミチン酸	
エステル	—
⑪赤色酸化鉄	1.6
⑫二酸化チタン	1.6
⑬赤色202号	1
⑭黄色4号	0.8
⑮チタンコーティッドマイカ	7
⑯酸化防止剤	若干量
⑰香料	若干量
(製法)	

実施例1：成分⑧を成分⑦の一部に分散し、85℃にて溶解させてベースとした。一方、成分①～⑥及び成分⑦の残部を釜に仕込み、85℃～90℃にて溶解せしめた。次いであらかじめ調製しておいた前記ベースと成分⑭及び⑮を加え均一に溶解し、更に成分⑨～⑬を加え、85℃にて分散せしめた。減圧脱気後、所定の中味内蔵型紅筆タイプ口紅の容器に充填し、

放冷して、所望の口紅を得た。

比較例1及び比較例2：成分①～⑦を釜に仕込み、85℃～90℃にて溶解せしめ、次いで成分⑭及び⑮を加え均一に溶解し、更に成分⑨～⑬を加え85℃にて分散せしめた。減圧脱気後、所定の中味内蔵型紅筆タイプ口紅の容器に充填し、放冷する。

実施例1並びに比較例1及び比較例2の口紅の諸特性は第4表に示した通りであった。

(以下余白)

第4表：実施例及び比較例の口紅の諸特性

	実施例 1	比較例 1	比較例 2
硬 度	5.5	29.5	6.0
①押し出す ②押し出す ③押し出す ④押し出す ⑤押し出す ⑥押し出す ⑦押し出す ⑧押し出す ⑨押し出す ⑩押し出す ⑪押し出す ⑫押し出す ⑬押し出す ⑭押し出す ⑮押し出す ⑯押し出す ⑰押し出す ⑱押し出す ⑲押し出す ⑳押し出す ㉑押し出す ㉒押し出す ㉓押し出す ㉔押し出す ㉕押し出す ㉖押し出す ㉗押し出す ㉘押し出す ㉙押し出す ㉚押し出す ㉛押し出す ㉜押し出す ㉝押し出す ㉞押し出す ㉟押し出す ㊱押し出す ㊲押し出す ㊳押し出す ㊴押し出す ㊵押し出す ㊶押し出す ㊷押し出す ㊸押し出す ㊹押し出す ㊺押し出す ㊻押し出す ㊼押し出す ㊽押し出す ㊾押し出す ㊿押し出す	○ ○ ○ ○ ○ <		

いずれの項目も50人美容専門の女子パネルで使用テストを行なった結果である。

なお、評価基準は以下の通りである。

- * 1 ○：中味が出やすい。
×：中味が出ない、又は出にくい。
- * 2 ○：スムーズに塗れる。
×：のびない。ムラに塗れる。
- * 3 ○：にじまない。
×：にじむ。
- * 4 ○：もちが良い。
×：もちが悪い。

通常スティック状口紅と同一処方である比較例1の口紅は紅筆に中味を押出しにくく、使用性も重く、のびが悪かった。通常スティック状口紅からワックスを大巾に減量して、中味を柔らかくし、出やすくした比較例2のものは、中味の出具合、使用性は良いものの、唇に塗られた後は、にじみが顕著で、もちが悪い。実施例1は容器から出やすく、のびが良く、塗布後のにじみもなく、もちも良いものであった。

実施例 2～6 (口紅)

次表の処方 5 種類の口紅を製造した。

(製法)

成分⑤を成分④に分散後、70～90℃にて溶解し、ベースとした。一方、成分①～③を釜に仕込み、85～90℃にて溶解し、これに前述のベースと成分④及び⑥を加え、均一に溶解した。次いで成分⑦～⑩を添加し、85℃にて分散した。脱気後、中味内蔵型紅筆タイプ口紅の容器に充填し放冷した。

実施例 2～6 の口紅は、いずれもピストンの圧力により中味が容易に筆に押出され、使用時ののびが良く、にじみがなく、化粧もちの良い仕上りのものであった。

(以下余白)

実施例 2～6 の口紅の処方

成分	実施例 2	実施例 3	実施例 4	実施例 5	実施例 6
① セレシン B	7	7	7	7	7
② カルナバワックス	4	4	4	4	4
③ キャンデリラワックス	7	7	7	7	7
④ 液状ラノリン	1	1	1	1	1
⑤ メチルフェニルポリシロキサン	2	2	2	2	2
⑥ グリセリルトリステアレート	5	5	5	5	5
⑦ オリーブ油	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7
⑧ 流動パラフィン	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
⑨ 二酸化チタン	2	2	2	2	2
⑩ 赤色酸化鉄	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
⑪ 黒色酸化鉄	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
⑫ 赤色 202 号	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
⑬ ジメチルベンジルドデシルアンモニウムモンモリロナイトクレー	2	2	2	2	2

実施例 7 (口紅)

成分	配合量 (%)
① セレシン B	6.5
② カルナバワックス	1
③ キャンデリラワックス	6
④ 液状ラノリン	1.5
⑤ メチルフェニルポリシロキサン	2.0
⑥ グリセリルトリステアレート	2.5
⑦ オリーブ油	12.5
⑧ 流動パラフィン	1.0
⑨ 二酸化チタン	1
⑩ 赤色酸化鉄	0.7
⑪ 黒色酸化鉄	0.1
⑫ 赤色 202 号	0.2
⑬ ジメチルベンジルドデシルアンモニウムモンモリロナイトクレー	2

(製法)

成分③を成分⑤の一部及び成分⑥の一部とともに、予め 3 段ロールで混練し、ベースとした。一方、成分①～④、⑥と成分⑤及び⑦の残部を釜に仕込み、

85～90℃で溶解した。次いでこれに予め調製しておいたベースを加え、分散後、成分⑧～⑫を加え、更に 85℃にて分散せしめた。脱気後、中味内蔵型紅筆タイプ口紅の容器に充填し放冷した。実施例 7 は、第 5 表に示すように大きなチキソトロピー性を示し、従って中味が容易に筆に押出され、使用時ののびが良く、にじみもなく、もちの良い仕上りのものであった。

第 5 表：実施例 7 の口紅チキソトロピー性*

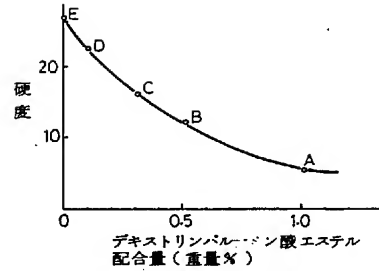
測定回転数	粘度 c p s
6	29450
12	17250
30	4950
60	1970

* B 型粘度計にて 50℃で同一のローターを用いて測定

4. 図面の簡単な説明

第1図は第1表の口紅処方A～Eに示すようにゲル化剤であるデキストリンパルミテン酸エステルを種々の割合で配合した時の口紅硬度の変化を示すグラフ図であり、

第2図は第1表の口紅処方E～G及びA'に示すようにゲル化剤を含まずワックス配合量を変化させた時の口紅硬度の変化を示すグラフ図である。



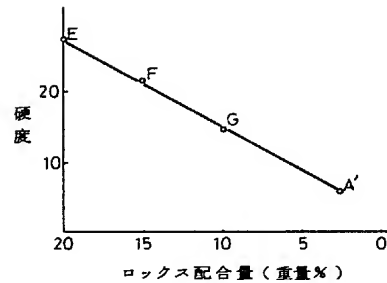
第 1 図

特許出願人

株式会社 資生堂

特許出願代理人

弁理士 青 木 朗
 弁理士 西 舘 和 之
 弁理士 石 田 敬
 弁理士 山 口 昭 之
 弁理士 西 山 雅 也



第 2 図